

紙工機械業界の プラットフォームに “シェルフレディ元年”に意欲

小崎 亨氏

(株)日本紙工機械グループ 代表取締役社長



2010年4月、タナベインターナショナルから日本紙工機械グループとして新たなスタートを切りましたが、大きな手ごたえをつかめた1年でした。

機械の受注が堅調だったおかげで、出荷前にお客様をお招きする形でほぼ毎月、本社工場で見学会を開催できました。当社のものづくりへの姿勢をお客様に実感していただき、安心感につながったのではないかと考えています。当初は製品開発のカンフル剤として年2回程度の開催を予定していましたが、常にお客様の視線を意識することで、工場の整理・整頓など5Sもしっかりと行え、工場をきれいな状態に保つこともできました。

社内のイベントの他にも7月の段ボールセミナー、10月の東京パック、11月のダイカッティング・シンポジウムなど外部のイベントにも積極的に参加し、存在感のアピールに努めました。

ものづくりに関しては、上下2段で各2枚のブランクを貼り合せることが可能な「トライフィード」の開発が最大のトピックです。トライフィードを搭載した製函機は、陳列効果に優れたツインピースボックスや仕切付きワインボックス、3ピースボックスなど、これまでの段ボール製函機では製造が不可能だった形態を供給できます。数年前から欧米で普及している「シェルフレディパッケージ」を日本の業界に提案し、注目を集められたのは大きな成果です。トライ

フィードの発表で昨年は、日本における「シェルフレディパッケージの夜明け」となったのではないのでしょうか。今年初めに2台の国内出荷を予定しており、2011年を「シェルフレディ元年」とできるよう、会社一丸となって取り組んでいきます。

2010年の業績は、円高の影響で輸出が厳しかったのを国内の売上でカバーする形となりました。従来は、国内・海外の売上比率が半々でしたが、現在の為替水準が続くという前提ならば、今年は国内の比率を引き続き高めていく必要があると考えています。

当社では、社員一人当たり3000万円という売上目標を掲げています。この目標を達成できるよう、今年は月2台の出荷をめざしていきます。

海外展開では、中国市場での販売が鍵です。傘下のタナベインターナショナルの機械はすでに中国で多くの実績を得ています。もう一方の菅野製作所の最新鋭製函機「GX」シリーズを2011年から中国で展開していきます。小回りが利く紙器用グルアとして、中国のトップクラスから次のグループまで幅広い層に受け入れられる可能性があるかと期待しています。

当社は「日本の紙工機械業界を活性化する」を理念に掲げています。同業他社とは形にこだわらず連携していきたいと思えます。当社が持っている中国のネットワークを活用してもらうことで“販売のプラットフォーム”としての役割を果たせればと願っています。☒